

第7期「協同を学ぶ」インターンシップ

つながりインターンシップ
@協同

2020 年度
実施報告書

一般社団法人
くらしサポート・ウィズ



「協同を学ぶ」を進化させた 2020年度インターンシップ生と 受け入れ団体へ感謝を込めて



一般社団法人くらしサポート・ウィズ
理事長 吉中 由紀

コロナ禍で業務多忙な中、インターンシップ生を受け入れていただいた各協同組合と社会的企業の皆様に感謝申し上げます。2020年度はコロナ禍ということもあり一般公募はせず、これまで関係してきた大学や団体を参加呼びかけ範囲にしました。8大学から18名が参加し、17団体に受け入れていただきました。

今年度は体験実習ができないため、皆さんと意見交換の上WEBのみで調査型インターンシップとして実施しました。どの団体もエッセンシャルワークが中心の事業のため、緊急事態宣言から困難な状況が続きましたが、そうした中でも私共のインターンシップに積極的に関わってくださいました。「困難な状況の中での活動」を「学生達はどのように聴き・考え・理解したのか」が今年度のインターンシップの要でもありました。受入団体の皆様には重ねて御礼申し上げます。

さて、学生の皆さんは知らない者同士で編成されたチームのメンバーでテーマや調査項目を話し合い、自分たちで考えながらすすめました。「働くこととは」「協同組合とは」について、団体から直接ヒアリングする中で見方や考え方が変化したという報告もあり、限られた中でも目標を達成できました。また、受入団体から問いかけられることで、改めて整理される事もあったと報告もされています。

WEBで手探りの中進めたことが学生自身の主体的な関わりを引き出すプログラムとなったことは（予期せぬ）成果でした。

インターンシップ生は、この貴重な体験を通して協同組合や社会的企業の目指す姿を知り視野を広げ、「仕事とは何か」という「働くことの意味」を考えただけでなく、仲間と力を合わせることで課題を打破する力をつけたのではないのでしょうか。

厳しい環境で頑張った皆さんは、自らだけでなく次の人材育成の担い手になってくれるのではと期待しています。

インターンシップ修了おめでとうございます。

2020年12月25日（金）



目 次

理事長あいさつ	
目次	2
調査受入先・参加学生 目次	3
全体スケジュール	4
Special thanks!	6
調査報告	
社会的企業系チーム	8
農業協同組合系チーム	27
生活協同組合系チーム①	41
生活協同組合系チーム②	60
労働者協同組合系チーム	74
協同金融系チーム	91
企画参加学生の感想	111
学生アンケート集約結果報告	113
調査受入先アンケート集約結果報告	120
まとめ	123

※いただいた原稿は、原則として編集しておりません。

つながりインターンシップ@協同とは

【目的】

- ・若者に協同組合や社会的企業のミッションや仕事、人との関わりを伝える
- ・その体験を通して若者に「仕事とくらしの関係」や「働くことの意味」を考えてもらう
- ・受入団体や主催者も学生とのふれあいから、自らのミッションや仕事を振り返える
- ・一連の流れを通してインターンシップに参加する関係者全てで「協同」や「人とのつながり」について共に考える
- ・協同組合や社会的企業、教育機関連携で「協同の人材育成」につながる基盤形成をめざす

【特徴】

- ・受入れは異種/異分野の協同組合や社会的企業で、希望に添った団体で職場体験し、体験を学生同士で共有し学びを深める場がある*¹
- ・インターカレッジでの交流を通して、さまざまな考えを知り学生自身の世界が広がる
- ・社会人との交流を通して、「働くこと」や「仕事」の自分のイメージが具体的になる
- ・フラットな関係を大事にしたプログラムなので、学生が伸び伸びと学べる
- ・学生個人の特長や良さをインターンシップの贈り物として伝える*²

*¹ 今年度はコロナ禍により体験実習は中止となった。

*² 例年は一人ずつ贈る言葉をいただいていたが、今年度はチーム全体へいただいた。

全体スケジュール

日時	内 容
4月13日 担当者会議 (実施の可否を意見交換)	新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）による緊急事態宣言（4/7～5/25）を受け、これまでのインターンシップ参加団体、関係者に呼びかけ、企画中止も含めて意見交換するための会議を設定。8 大学教員、5 受入団体、3 協力団体、事務局含め 20 名で意見交換した。 「協同組合は人のくらしと密接。コロナ禍ではどのような事態が生じ、何をしたのか、協同組合の価値と実践を残す必要がある」という意見でまとまった。
5月	担当者会議を受けて事務局内で方針を検討。社会的企業も正式に受入団体として位置付けた。
6月上旬 大学で趣旨説明	立教大学藤井ゼミや駒澤大学李教授・法政大学阿高講師のゲストスピーチから、それぞれ 4 名、2 名、2 名の応募につながった。 明治大学大高（協同組合論）ゼミからも 4 名の応募があった。
6月15日 企画会議 (実施形態と範囲の検討)	有志で開催。学生 5 名（旧 3 名、新 2 名）、教員・団体各 4 名、有識者 5 名、ウィズ 2 名の合計 20 名で意見交換した。 インターネットを活用した調査報告型インターンシップを行うことを決定。この形式でも参加するかどうか、これまでの参加大学、団体に呼びかけた。 ゼミ活動と類似すること、体験実習ができないことから、4 大学が参加を見合わせた。
6月29日 第 1 回作業部会	学生 6 名（インターンシップ修了生と応募生 各 3 名）とよしごとステーション（協同組合バンク運営協議会）およびウィズ担当者をメンバーとして、インターンシップスケジュール等を検討した。 ※インターンシップの企画・運営側に学生が初めて参加した。
7月1日～15日 広報期間	大学キャリア支援室や旧知の教員（非営利組織論、ボランティア論、農業経済学等）、営利・協同団体へ参加を呼びかけた。 情報は常に全体共有できるように Google を活用し、インターンシップ専用ドライブを設置した。
7月11日 第 2 回作業部会	学生の募集や情報の共有方法、全体企画の確認。 キックオフ・イベントを検討し、インターンシップ修了生（以下、修了生）が核となって進行することを確認した。
7月15日～31日 学生の応募期間	参加団体より基礎情報と紹介動画（URL）を提出いただき、Google ドライブでネット上に掲示、応募者がいつでも閲覧できるようにした。 応募学生の定員は 20 名とし、応募の要件として「学生自身が感じている社会問題（300～500 字）」と、キックオフ・イベント後半のグループトークの希望先を提出してもらった。
8月3日 第 3 回作業部会	応募学生と社会的課題の内容確認、キックオフ・イベントの内容と当日運営検討。 司会進行、自己紹介とアイスブレイク、まとめを修了生が担当することになった。
8月7日	キックオフ・イベントの運営を担う修了生と細かな確認。
8月8日 13時～16時 キックオフ・イベント	ZOOM による開催。前半は、自己紹介（団体・学生・協力者・事務局）、調査受入団体からのプレゼンテーション（ミッションや事業と組織紹介、学生への期待）を実施した。後半は、学生が希望する団体と自由に質疑を行えるよう、団体を系統別に 6 グループに分けたブレイクアウトセッションを 3 クール実施した。修了生が開会、アイスブレイク、閉会等を担当した。 参加学生 18 名（応募者）、教員 8 名、17 団体、4 協力団体・有識者、修了生 3 名、事務局 2 団体 3 名の合計 53 名が参加した。 終了後、参加学生には調査希望団体リストを提出してもらった。

8月14日 調査先団体を学生へ回答	団体を個別に調査するのではなく、系統別に団体をまとめ、調査することに変更した。学生はコロナ禍で孤立しがちだったため3名1チームのチームワークとした。チーム編成にあたっては、学生の希望を活かしつつ大学・学年等が極力重ならないようにした。
8月17日 第4回作業部会	事前レクチャーと交流会を合体させ、以下の通りとした。 ① 調査に必要な基礎知識と手法のレクチャー ② 修了生がインターン生へ体験を伝えたいという希望から、インターンシップ受入団体職員と修了生の対談 例年実施していた「協同組合の基礎知識」「大学生向け消費者教育」「プレ社会人のマナー」は録画を作成しオンデマンドにした。
8月22日 13時～16時半 交流会	ZOOMによる開催。前半は修了生の運営で対談を実施した。団体は企画担当修了生がインターンシップを体験した生活クラブ神奈川とパルシステム神奈川。対談はインターンシップ体験に留まらず、ミッション・仕事と働く意味・協同組合が果たす役割など幅広くなった。後半はシンクタンク研究員による調査手法のレクチャーで、事前調査の重要性が特に強調された。
8月24日～31日	系統別学生チームのチームづくり期間とした。チーム内で社会的課題への意見交換、調査テーマの設定の他、ホームページやYouTubeを活用して事前調査を行ってから団体へ挨拶するように伝えた。
9月～10月 チーム活動	各チームが団体へアクセスレインタビュー調査を実施、終了後分析し検討した。発表用パワーポイントをチームで作成した。
10月末～11月	チームの調査報告パワーポイントと活動日誌およびインターン生個人の感想を事務局へ提出した。
11月24日 第5回作業部会	修了報告会の内容を検討した。修了生2名が参加学生へ卒論テーマに係るアンケート調査を実施した。卒論のテーマは「若者の協同組合への出会いと参画」で、本企画でも活用させていただくことにした。
12月14日 第6回作業部会	修了報告会の運営を決定した。首都圏で都県外移動自粛要請が出なければ、学生のみリアル参加とし、希望によってはオンライン参加も可とした。最終決定は21日に行うこととした。調査結果プレゼン、アンサートーク、一人一言等企画を確認した。
12月25日 13時～16時 修了報告会	ZOOMによる開催。71名が参加した。学生6チームごとに発表し、各団体がアンサートークを行った。終了後、インターンシップを終えて学生の一人一言、大学教員と修了生から一人一言、ウィズから全体のまとめ、よいしごとステーションから情報提供を行った。
1月27日 15時～17時 振り返り会議	企画参加新旧インターン生、大学教員、受入団体、有識者（協力者）で次年度へ向けた振り返りを行った。受入団体アンケートと修了生が卒論のテーマにしたアンケート調査結果も参考に議論を行った。実施報告書を紙媒体からデジタルデータへ転換し発行した。
2月	次年度インターンシップ原案作成（予定）
1月～	「よいしごとステーション」が中心となり、 ① 団体より情報収集、大学や学生へ提供（団体のイベント、ボランティア募集、就活型インターンシップほか）、 ② インターンシップ終了後の学生へのフォローとして、就活相談の対応や、インターンシップ関係者が集えるような居場所づくりも継続して追求し、総合的な協同（組合）型人材を継続して育成・交流する仕組みをつくる。

※活動は主に ZOOM を利用したオンラインで実施し、情報提供・共有については Google ドライブを利用した。

以下は、「協同を学ぶ」インターンシップの修了生2名が「どのようにすれば、協同組合に若者を巻き込めるか」を卒論のテーマに設定し行ったアンケート調査報告です。若者の目線で同年代の若者を調査し分析した本報告は貴重な示唆に富むと考え、第7期インターンシップ実施報告書に掲載させていただくことにしました。

※本報告用に曾山氏にコンパクト化を依頼し、特に自由記述に関しては、3点に絞っていただきました。

【協同組合に関するアンケート調査】

本報告執筆：立教大学コミュニティ福祉学部4年 曾山英和

共同調査者：立教大学コミュニティ福祉学部4年 長壁 唯

1. 調査概要

本調査は、ウィズ主催の2つの企画に参加した大学生に向けてアンケート調査を実施し分析、まとめたものである。

- ・2020年11月3日開催、非営利・協同セクターの仕事説明会「私らしいしごと☆発見会」
- ・2020年12月25日開催、第7期協同を学ぶインターンシップ「つながりインターンシップ@協同」

アンケート形式はチェック項目と自由記述で構成しクロス分析も行った。

- (1) チェック項目の回答によって、若者（大学生）にとっての協同組合の位置を図った。
- (2) 自由記述の読み込みとチェック項目の回答とのクロス分析から、2つの企画が若者に及ぼした変化を考察した。
- (3) (1) と (2) を通して若者と協同組合の関係に触れつつ、2つの企画の価値と可能性についてまとめた。

2. 調査対象

調査対象は首都圏内にある大学の在学生（1年生～4年生）である。「非営利・協同セクターの仕事説明会」（以下、説明会）を①、協同を学ぶインターンシップ（以下、インターンシップ）を②と表記する。

①非営利・協同セクターの仕事説明会

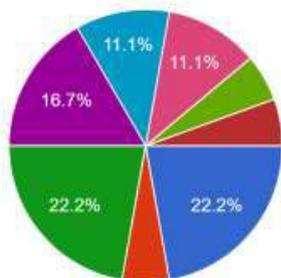
対象者総数(説明会参加者数)	32 (人)
回答者数	18 (人)
回収率	56.25 (%)

②協同を学ぶインターンシップ

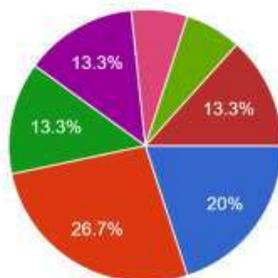
対象者総数	18 (人)
回答者数	15 (人)
回収率	83.3 (%)

3. 調査項目と結果

(1) 参加の理由（①②共通 Q. 説明会に参加しようと思った理由はなんですか）



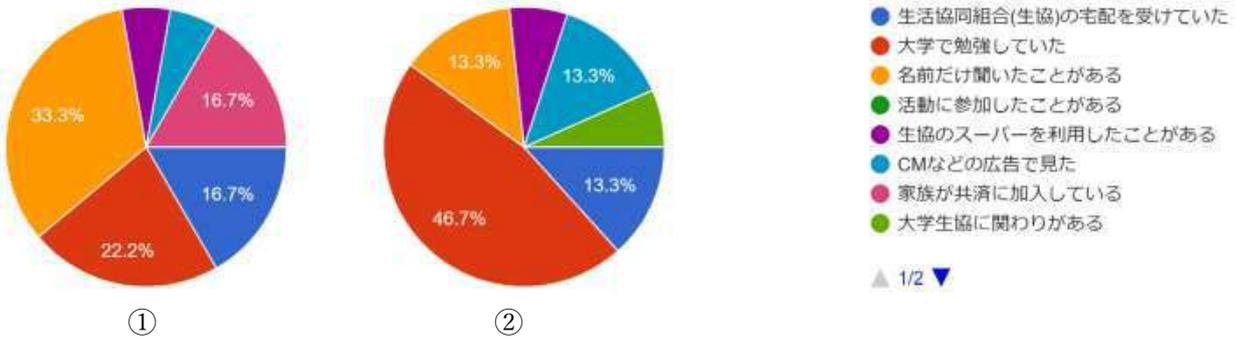
①



②

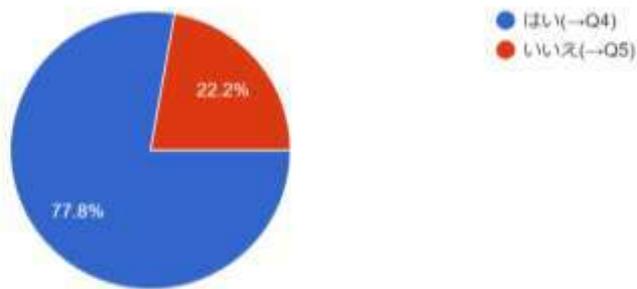
- 協同組合について知識がなかったから
- 大学などで協同組合について学んでいるから
- 非営利組織に関わっている
- 非営利組織で「働く」ことに興味がある
- 事業内容に興味がある
- 非営利組織でのやりがいに興味がある
- 社会に役立つ仕事に興味がある
- 業界研究
- 知り合いに紹介されて

(2) 協同組合の認知度 (①②共通 Q. イベント参加以前の「協同組合」に関する認知の有無 についてお答えください)



※転載の仕様上隠れてしまった選択肢として、『家族が協同組合で働いている』、『「協同組合」について何も知らなかった』の二つがある。

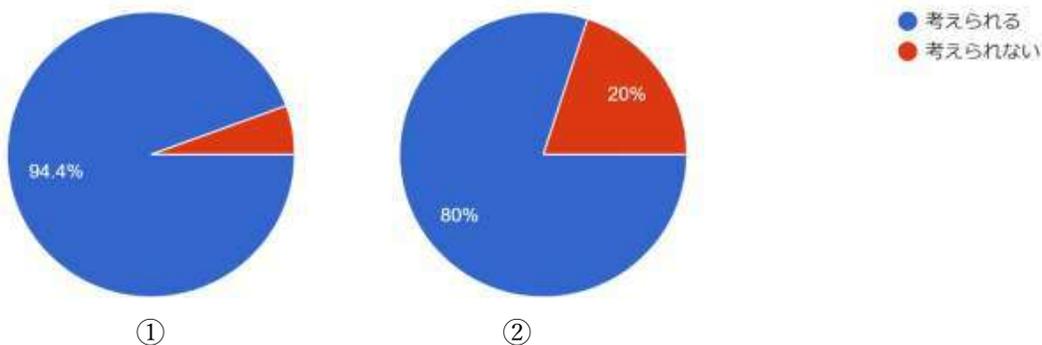
(3) イメージ (①のみ実施-Q3. 各団体の説明を受けて「協同組合」のイメージは変わりましたか)



①-Q4. イメージが想像と違った箇所について (やりがい、働く人、ワークライフバランス、福利厚生、事業内容など) どのようにイメージが変わりましたか (自由記述・抜粋)

- ・協同組合に関して知識がなく、農業を学んでいる人が就く仕事なんだろうと思っていただけ、そんなことはなく地域に貢献したいと思う人なら挑戦できるのだと分かった。
- ・イメージしてた事業以外にも沢山の事業をしていた。
- ・収入面で、安定した収入を得ることもできるのだとイメージが変わった。また、利用者本位で活動するため、自分の時間は作りづらいのではないかと思っていたが、ワークライフバランスを取ることもできるのだと知った。

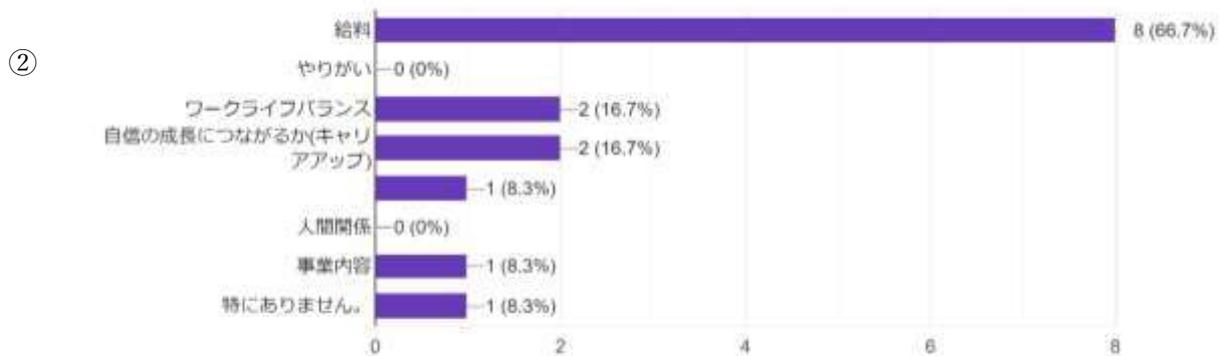
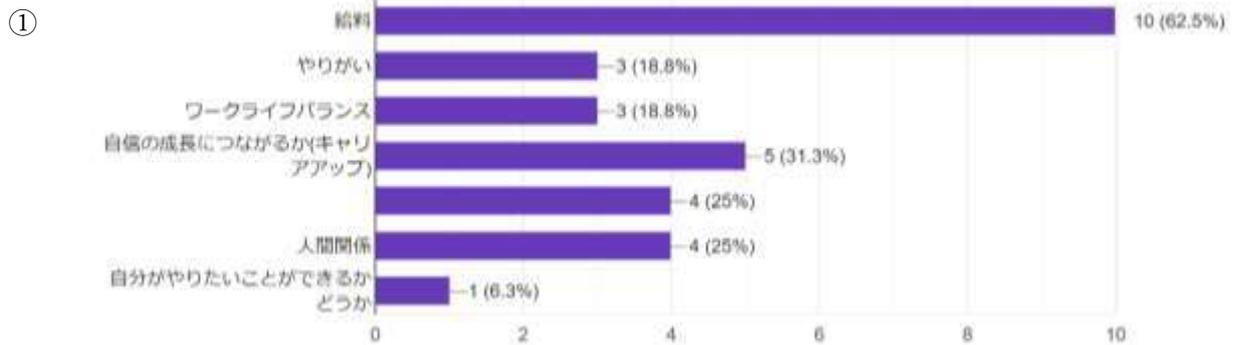
(4) 就職 (①②共通-Q. 協同組合を就職先として考えられますか)



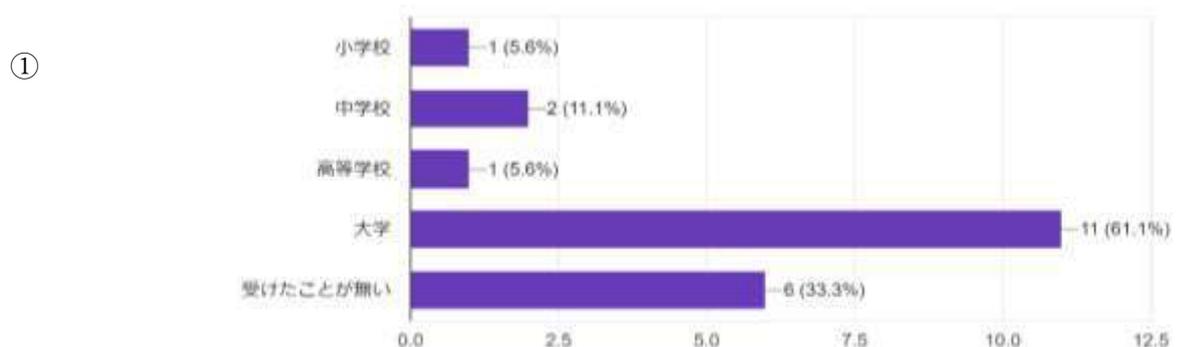
①②共通-Q. そう思った理由を教えてください。(自由記述・抜粋)

- ・自分の存在意義が見出せる場所ではないかと思えたから。①
- ・やりがいのある仕事、主体的に行動できる仕事だと思ったから。①
- ・地域に役立つ仕事をしたいと考えており、協同組合はそれにぴったりだと思うため。その理念に非常に共感出来る。①
- ・協同組合がどのようなところか分かったから。②
- ・自分の理想とする働き方をできるのではないかという期待を抱くことができたから。②
- ・相互扶助の精神が自分に合っていると思ったからです。②

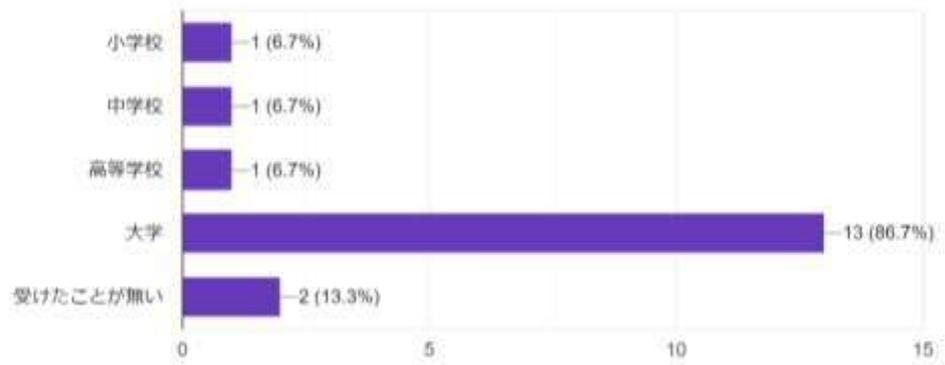
(5) 就職にあたっての懸念 (①②共通-Q. 懸念している点があれば教えてください)



(6) 協同組合教育 (①②共通-Q. 今までの教育課程(小～大)で「協同組合」に関する学習を受けたことがありますか。心当たりのある項目にチェックしてください)



②



(7) 協同組合への提案

①-Q 協同組合が若者に対してできそうな事業 / 自分も参加したいと思える事業やイベントがあれば教えてください
(自由記述・抜粋)

- ・ 社会課題を解決するための体験の機会
- ・ 森林組合で林業体験。
- ・ 人とのつながりをより意識できる場なら参加したくなる。
- ・ 農協などのボランティア活動
- ・ 協同組合がどういう仕組みなのかワークショップなど開けるといいと思う。

(8) インターンシップ参加学生のみへのアンケート結果

Q. インターンシップに参加する以前の協同組合に抱いていたイメージを教えてください (自由記述・抜粋)

- ・ 共同で働く組織 ・ 福祉に関わる事業が多い ・ 宅配 ・ 知ってるけどよくわからない
- ・ 株式会社とは違う組織構造を持っている ・ 団体に所属する人が出資する、普通の企業とは違うイメージ
- ・ 少し宗教のような集団という偏見がありました。
- ・ 給料が安そう
- ・ 組合員への貢献ということだけは知っていたが、何をしている業種なのかは知らなかった。
- ・ 民間企業とは違う組織だと言うのは理解していたが、何が違うのかよくわかっていなかった。
- ・ 地域密着というイメージです。

Q. 団体のどのようなところに共感しましたか



Q5. 上記について具体的に教えてください (自由記述・抜粋)

- ・自分のやっていることに誇りを持つことが1番だと思った。そうであれば楽しく働けると思うし、辛くても頑張れる気がする。
- ・組合員さんとの関係性がとても温かいもので、働いていてもただお金やサービスの供給者ではなく、一人間として見て、サービスを共有していることが魅力に感じたし、共感した。
- ・トップダウンではなく、何かあれば、みんなが平等であるので話し合うという姿勢があった。

Q. 団体を調査して、協同組合をどのような場所だと感じましたか (自由記述・抜粋)

- ・お金という形の利益だけでなく、人との関係性や誠実さという、繋がりを大切にしている組織。
- ・地域の人のため、組合員のため、また環境やこれからの未来のために活動しようという気持ちを強く持っている印象を受けました。また、自分が地域貢献したい、何かやりたいということを実行する力や思いがあれば実現させてくれる場所だと思いました。
- ・人の温かさを感じることができる場所。他者との協力を感じられるような場所。

Q. インターンシップを通じて、「働くこと」へのイメージの変化があれば教えてください (自由記述・抜粋)

- ・働くことは必ず利益を生まなければいけないと思っていたが、必ずしもそうではないことに気付かされた。
- ・以前はお給料をもらうための活動だと思っていたが、現在は働くことそのものに価値があると思っている。
- ・今まで、ある企業に入ったら利益のために目標を掲げて、決まっている業務をひたすらこなし、それは生活のために、というのが「働くこと」だと思っていました。今回のインターンシップを通じて、利益を目的としない働き方もあり、みんなで助け合って組合員、地域貢献を考えるお金のためではない純粋に誰かのためを思って仕事をする働き方を知り魅力を感じました。働くことに対するマイナスなイメージがプラスになりました。

Q. 協同組合が若者に対してできそうな事業 / 自分も参加したいと思える事業やイベントがあれば教えてください (自由記述・抜粋)

- ・人気のコンテンツとのコラボ、コラボカフェなど
- ・アルバイトでもお手伝いできるような事業、イベントがあれば参加してみたいと思う。
- ・協同組合についてのインターンシップはたくさん大学生に協同組合を知って頂くきっかけになるイベントであると思います。また、小学生や中学生には農業体験など自らの肌で経験するイベントが協同組合を知って頂く良いきっかけになると思いました。

Q. 若者だからこそ組合員活動に参加する価値はなんだと思いますか (自由記述)

- ・社会との繋がりが増えること、多世代での交流が生まれること、自分がやっていることが、何かの役に立つ実感を得られること。
- ・株式会社ではない非営利組織を知ることができる。自分の地域のこと、働くこと、環境のことを考える機会になる。
- ・新しい目線が生まれることだと思います。やはり、若者は組合員活動に参加している人が少ないと感じるので、参加することで新たな考えや目線が入り、組合員活動が変革するきっかけになると思います。

4.まとめ ～アンケートから考える若者と協同組合の関係～

卒論の「付属資料 協同組合に関するアンケート調査」のデータから、参加学生が協同組合についてどれほどの認知を持っているのか、イベントを通じて実際に協同組合に触れた学生がどのようなイメージを持ったのかを確かめる。

以下「説明会」向けアンケートを①-Qn、「インターンシップ」向けアンケートを②-Qn に置き換え、各設問ごとに分析を行う。

(1) ①②共通 Q.「イベント参加以前の「協同組合」に関する認知の有無 についてお答えください」

この設問では、イベントの参加学生が今までどの程度協同組合に関わってきたのかを質問した。まず①で最も多かったのが「名前だけ聞いたことがある」の33.3%、次点が「大学で勉強していた」の22.2%。また生協や共済など協同組合を利用していた経験のある学生が全体の33.4%いた。一方②では「大学で勉強していた」が一番多く46.7%、「名前だけ聞いたことがある」「生協の宅配を受けていた」「CMなどの広告で見た」がそれぞれ13.3%、生協や共済など協同組合を利用していた経験のある学生が全体の13.4%という結果になった。

この結果の中でまず注目したのは、やはり名前以上の認知を持たない人の多さだ。イベントに参加するまで、もしくは大学で協同組合に関する講義を見つけるまで、協同組合について全く知らなかったという人が全体の約半数を占めているというこの結果は、協同組合の認知の低さを改めて裏付けるものになったのではないだろうか。またCMなどの広告から関心を持った人がほとんどいなかった点からも、CMでよく聞く「パルシステム」や「JA」の名前は知っているても具体的にどのような組織かまでを知るきっかけにはなっていない、という現状を推測することができる。

(2) ①-Q3, Q4「各団体の説明を受けて「協同組合」のイメージは変わりましたか」「イメージが想像と違った箇所について、どのようにイメージが変わりましたか」

この設問では「説明会」で聞いた各団体の説明を通じて、事前に持っていた協同組合へのイメージがどのように変化したのかを聞いた。またこれはインターンシップなどに比べて極めて短い協同組合職員との交流時間で、どれだけ協同組合について理解を深めることができるのかを確かめる質問でもあった。Q3の問いに「はい」と答えたらうち、Q4の自由記述項目に回答してくれた人の中でおおよそ共通していたのは「人を大切にし、人のために働くことができる場所だと分かった」という点である。

協同組合は「一人は万人のために、万人は一人のために」の精神によって運営されるものであり、それこそ協同組合が第一に伝えたいことでありながら、現状中々認知を得られていない部分でもある。誰かのために活動することを第一に考えながら、自分らしく働くことができる場所である、とまで伝えることができるのならば、短時間のイベントであっても、協同組合への興味関心を惹くという目標は十分達成できると考えてよいだろう。

(3) ①②共通-Q「協同組合を就職先として考えられますか」/Q「そう思った理由を教えてください」

この質問に対し「はい」と答えたのは①が94.4%、②が80%と、ほとんどの学生が協同組合への就職を前向きにとらえていることが分かった。

②を見る限り、イベント参加以前まで協同組合についてほとんど知識を持たず、人によっては大きなマイナスイメージを持っていた状態から、約8割以上の学生の意識をプラスな方向に変化させたことになる。(2)と合わせて、これら協同組合イベントの有用性を改めて認識させられた結果になった。

(5) ①②共通-Q「今までの教育課程(小～大)で「協同組合」に関する学習を受けたことがありますか。心当たりのある項目にチェックしてください」

アンケート最後の質問項目では、そもそもの話として、今までの教育課程の中で参加学生たちに協同組合や社会教育、労働教育について学ぶ機会がどれだけあったのかを調べる為、小学校、中学校、高等学校、大学の内どこで協同組合教育を受けたことがあるかを聞いた。結果として、大学入学以前に協同組合に関する何らかの教育を受けたことがあ

る学生はほぼおらず、現状でそういった機会は大学でしか得られないことが読み取れる。

(2) と結び付けて、若者の協同組合に関する認知が低い原因として最も大きな要因になっているのが、(6) から読み取ることができる「協同組合を知る機会・学ぶ機会の圧倒的な少なさ」であるとみて間違いないだろう。

以上、ここまででアンケートの分析を行ったが、この分析から分かったことをまとめると以下の五つになる。

- (1)協同組合に対する若者の認知はやはり低く、また各所で見聞きする生協などの広告が若者層の興味関心を惹きつけかけになっていない。
- (2)説明会などの時間の短いイベントであっても、知るきっかけさえあれば協同組合が掲げる「一人は万人のために、万人は一人のために」の精神に共感し、興味を示す学生は少なくない。
- (3)説明会やインターンシップなどの協同組合について学ぶイベントに加え、自分たちが関心を持つ社会問題などに対する学びの場、活動の場が協同組合にあれば、活動に参加する若者が増える可能性は高い。
- (4)協同組合は若者が考える就職活動の選択肢になり得る魅力を確認に持っている。一般企業や行政など他の選択肢に劣るものではない。
- (5)協同組合に関する若者の認知の低さには、日本における労働教育・社会教育の脆弱さが大きくかかわっている。

上記の内、この研究で特に注目すべきだと考えたのは、(2)(3)(4)の三つ、説明会やインターンシップなどの現在行われているイベントが、参加学生の意識の変化に大きく影響を及ぼした結果である。これらのイベントが、「この現代で働くことの意味を伝えたい」という当初の思惑を飛び越えて、多くの学生に「協同組合で働く」という新しい選択肢を与えることができるという、潜在的で非常に重要な役割を持っていることが明確になったためだ。

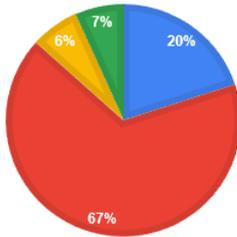
以上、この章から得られた結果を踏まえて、今後さらに協同組合に若者の関心を集めるためには、「私らしい仕事☆発見会」のような協同組合・社会的企業が集まる団体説明会や「つながりインターンシップ@協同」のような直接現場を体験しながら、その理念、活動の実態を学ぶことができる機会を増やしていくことが必要不可欠であると考えた。

調査受入先アンケート集約結果

Q:今回の調査型インターンシップに参加して、どのように感じましたか？

調査型インターンシップの企画

■非常に良かった ■良かった ■どちらでもない ■良くなかった



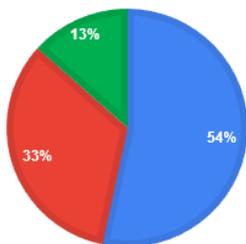
Q:大変良かった～良くなかったと感じた理由

学生の意欲で学び合いの場にはなったが、体験の不足は否めない。
コロナ禍にも関わらず、オンラインを通じて学生の考えを聞くことは嬉しく思います。
社会的活動に関心のある学生の声を聞くことができたため。
学生の問題意識が理解できたこと。オンライン形式でも可能なことが分かった。
学生と相互に意見交換できた
学生の意見を聞き大変勉強になった
学生の熱意が感じられた
オンラインインタビューでも学生の理解は深いように感じたため。
学生主導であったため、団体側からの一方的なインターンとならず、学生の「自主性」の育成につながったと感じました。
学生の皆様が事前によく研究されていた
コロナ禍でオンラインでの初めての試みだったが、自分たちで運営も考え、すすめてこれたことは素晴らしいと思う。
予想していた以上にオンラインでも意見交換、交流できた。
コロナ禍で工夫した取り組みであったと思います。
学生とは1回、ズームで話ただけでした。協同で働くことや地域ニーズに応える事業はやはり、体験していただかないとわからないと思います。
コロナ禍でも、できたから

Q:学生の貴団体への挨拶、インタビューに関する態度についてお伺いします

学生の挨拶・インタビュー態度

■非常に良かった ■良かった ■良くなかった



Q:左記のように感じた理由

不慣れな社会人(団体)相手とのやり取りの中でも最大限の気遣いなどを感じたためです。
事前に研究したことをもとに積極的に質問をしていただいた
メールでのやりとりも、ヒアリングの時の姿勢も、好感が持てました。
インタビューは事前に進め方や質問項目を通知してくれて考える時間が持ててよかったです。
態度についてZoomをつないだインターンシップ当日は良かったですが、事前の課題提出までの間は学生との連絡がなかなかつかず、インターンシップの開催日をリスケする必要がでてしまいました。
ズームのインタビューを一度行っただけで、追加の取材や質問もなく反応がありませんでした。まともはどうなっているのか、誤解はないか心配です。
学生さんのお考えを伺うことができたので
事前によく学んでいて、当事者意識も高かった。
事前に質問を頂くことでの確な回答ができた。
丁寧な姿勢でインタビューに臨んでくださいました。
学生のみなさんは誠実に対応していました。
下準備も十分で、積極的に学ぶ姿勢が感じられた
真摯に、一所懸命に取り組む姿勢に心を打たれた。
事前に当組合について調査しており、素晴らしいと感じた
インタビュー後に御礼のメール等もいただいたため。

Q: 今回のインターンシップでは、コロナ禍で体験実習ができないことから、調査報告型のインターンシップにしました。

団体の皆様にとっての収穫はありましたか？

オンライン学習については、日々学び・改良の繰り返しなので、良い機会でした。
時間の融通が利く。
リモートでのやり取りについて(難しさを含めて)見識を深めることができました。
一定の収穫はあったと思います。
直接的な就職活動とは別にこうした機会を得られたことは、貴重な時間だと感じました。より多くの人、特に若い世代に協同組合について知ってもらえることは、組織としても重要だと感じます。
対面が厳しい中、収穫はありました。
学生目線でのお話が、刺激になった。
はい。弊社主催の1day インターンに参加してくれた学生がいました。
学生の JA に対する率直な印象や、今後主流となる WEB でのインターンシップを経験できたことが収穫です。
WEB での開催方法、魅力の伝え方について、今後の参考になった
ありました。学生さんとじっくり話すことができ、自分たちの活動、事業、組織を改めてみつめる機会になりました。
弊社は従来から調査型でしたが、商品マーケティングという課題を設定して調査してもらう方式から ATJ の事業について調査するという方式は新しい試みでした。働き甲斐や一般の株式会社との違いなどは私だけではなく社員にも考えてもらい、自分の仕事を振り返るよい機会となったと感じています。
学生の率直な考え方を共有できて収穫となりました。
やり取りが何もなくだったので。協同労働に関心をもっていただいたことは励みになります。
学生さんの発表を聞くことができよかったです

【感想】

運営ありがとうございました。コロナ禍で計画が大きく変更になったことで、ご苦労されたと推察します。他項目で記載した以外のことを記載するなら、調査期間の短さに難があると感じました。当然、学生も私たち団体側も手探りではあったと認識していますが、今後もコロナ禍の状況は早々に改善されないと想定するならば、学生と受入団体との関係性を深める方向にしていければと考えています。ワーカーズコープで受入した学生は、私たちの映像資料の借用を希望するなど、大変意欲的でした。昨年度からお伝えしていることではありますが、私たちがインターンシップを実施し、達成したい目標は「協同労働に共感する人材に、運動的に出会い、仲間になる」ことですので、今後もこの機会は大切にしていきたいと考えています。次年度以降もよろしくお願ひします。
このような社会状況にもかかわらず企画していただきありがとうございました。やらないよりはやった方が良いでしょうが、やはりオンラインには限界を感じました。対面で伝えることに意味を持ちながら活動してきたため、インターンシップに関わらず、全ての活動が早く元に戻ることを願うばかりです。どうもお疲れ様でした。
学生の皆さんのフレッシュな声をお聞きすることができ、自団体の活動を改めて見直すことができました。ありがとうございました。
オンライン形式は初めてのため、うまく説明ができたか不安でしたが、きちんと報告書にまとめていただいたので良かったです。
今回初めて参加させていただきました。協同組合について熱心に学ぶ学生の姿に、私自身初心に戻る思いがありました。パルシステムが、商品を配達するだけでなく組合員活動や地域社会への貢献に注力している点にとっても関心を持っていただき、また、働くことについてのインタビューを通して一人一人「協同」についてや生き方について考えていただけたことをとても嬉しく、頼もしく感じました。
事務局の皆さんの今回のご準備に対して感謝申し上げます。

<p>この度は、調査研究型インターンシップに団体として参加させていただきありがとうございました。新型コロナウイルスの影響で、相対を伴うインターンシップが実施できないことから、学生さんとのように関係性を築けるのか、遂行できるのか正直不安がございました。しかし御法人で様々なプログラムを計画・実施して下さったことで、参加学生達が協同組合の理解を深めていただくことが出来、また学生と接点を持つことができました。今回のインタビューに応じた職員からは、学生の学ぶ意欲に感動したとの声をいただいております。来年度も変わらず、宜しくお願ひ致します。</p>
<p>コロナ禍の形式としては調査報告型でも良いと思いますが、少人数やプログラムを工夫して体験学習での受け入れも可能かと思うので、次年度以降の参考にしていただければと思います。</p>
<p>この度は2020年度つながりインターンシップ@協同へ参加させていただき、ありがとうございました。インターンシップを通じ学生と交流できたことで、私たちが多くの「気づき」があり大変良い経験をさせていただきました。初のWEB開催という中、私たちも不慣れであり至らない点が多く申し訳ございませんでした。学生同士も会えない分連絡が上手く取り合えていないと感じる部分があったため、事務局でもう少し関与していただいた方が良かったのではないかと感じました。また、団体側としても少しでも充実したインターンシップとするため、学生と事務局のやり取りをもう少し早く団体側に伝えていただけると助かります。今後同様に開催される際の参考にしていただければ幸いです</p>
<p>WEBという形ではあったものの、学生の皆様に協同組合の考え方に基づいた信用金庫の魅力を伝えるいい機会となったが、できればもっと多くの学生の皆様にご参加いただけたとなおよかった。</p>
<p>学生さんはもとより、サポートされてる先生方、ウィズ事務局のみなさま、大変だったことと思いますが、有意義なインターンシップになったと思います。参加させていただきありがとうございました。</p>
<p>初めてのオンラインでしたのでそれぞれの立場でいろいろと試行錯誤の連続だったと思います。生活クラブ東京、神奈川と同じグループになりましたが、学生さんからの質問への回答は私も共感する点が多く、やはり「同志」だなと感じることがたくさんありました。惜しむらくは学生さんからの質問に対し各団体が個別に回答してお終いだったこと。一政さんの「迷惑をかけてもいい。その分、人が困っているときは助けられる人に」という家庭での教育方針、上田さんの東日本被災地でのボランティア活動などもっと協同という意義を深められる論点があったと思います。もっとインターン生、受け入れ団体という枠組みを超えてお互い意見交換できたらよかったと、後から思いました。</p>
<p>コロナ禍でも工夫したインターンシップを企画いただけたので、学生のためにインターンシップがプラスになっていれればと思います。</p>
<p>調査報告型とはいえ、ズームで1回話ただけでどのようにまとめているのか・・・せめて、「これで間違いはありませんか」と連絡をいただきたかったです。こちらから打診すべきだったのかもしれませんが、時期的に業務多忙と重なり、余裕がありませんでした。</p>
<p>今度とも、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。</p>

第7期「協同を学ぶ」インターンシップ 「つながりインターンシップ@協同」のまとめ

新型コロナウイルス感染症に対応して、後ずさりするのではなく前向きに一つ一つどうしたら解決できるのか、可能になるか考え、チャレンジを繰り返したインターンシップになりました。

①インターネットの活用

情報共有や企画・会議への参加（遠距離・移動時間等）の幅を広げ、とりわけ学生の活動時間帯の制約をなくしました。人の移動がない事が低予算につながりました。

②オンデマンドの取り入れ

情報の提供量を増やせた事と空いた時間帯で対応できる自由度を上げた事がある一方で、提供した情報に対してどの程度理解したかを図ることが困難でした。

③プログラムの変更

応募の段階で学生が考える社会問題を提出してもらい、かつ、事前学習で調査手法を学んでもらった結果、学生の問題意識が明らかになり事前準備も進みました。

④学生のチーム編成

可能な限り異なる大学、学年の組み合わせでチーム編成し、チームで系統別団体の調査にあたるプログラムにしたことや団体が用意したプログラムに学生が沿うのではなく、学生の疑問・質問に答える形式になったことも学生の主体性をより育みました。

⑤協同の広がり

今期のさまざまなチャレンジは6年間の蓄積から培われた大学や協力団体との信頼関係の上に成り立っています。企画ではファシリテーターやアドバイザーとして活躍いただいた他、学生チームごとに見守り役に入っていたりいただく等幅広いサポートをいただきました。

⑥体験の不足

インタビューやインターネット情報からの調査だけでは検証が難しく、インターンシップの核にはやはり体験実習が欠かせないと結論づけます。

コロナ禍でのチャレンジはプログラムの幅を広げた一方で、このインターンシップの核である「協同を学ぶ」の根底にある「人と人のリアルなつながりを体験する重要性」を再度位置付けました。



【編集後記】

新型コロナウイルス感染症は私たちの日常生活を根底から変えました。特に大学の授業はオンライン主体となり、学生は自室に籠る孤独な生活を強いられています。対面授業で学生という固まりと接していたところから、図らずも学生と一対一の関係に変化し、学生一人一人の考えを聴く機会もあると伺いました。その中で、若者らしい感性でコロナ禍に敏感に反応しながら近未来を深く考えていることがわかり、「若者はやはりすごいと思った」という報告もありました。その一方で、特に1年生は入学式もなく、12月の時点で2回しかキャンパスへ行けていないという発言もあり、自由闊達にいろいろな体験を通して成長が期待できる時代を孤立し苦しい時間を過ごしているのだなと感じました。

コロナ禍はまだまだ続くでしょう。インターンシップのより一層のブラッシュアップをめざしたいと考えます。

最後になりましたが、企画に参加してくれた新旧学生には本当に感謝しています。プログラムを今までにない形式のものへ進化させてくれました。ありがとうございました。



第7期「協同を学ぶ」インターンシップ実施報告書

「つながりインターンシップ@協同」2020年度

2021年1月20日発行

編集・発行 一般社団法人くらしサポート・ウィズ

〒169-0072 東京都新宿区大久保 3-2-4 出光新宿ビル 4階

TEL 03-6205-6719

<http://www.kurashidial.or.jp/>

*許可なく本冊子からのコピー・転載はご遠慮ください。

